OUHS

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

ジャーナル

大体大

Contents　Vol.211

2016.9.30

創立50周年記念特別号

02 NEWS

1 日本体育学会盛大に
2 大島鎌吉シンポジウム
3 開学50周年記念館竣工
4 開学50周年記念植樹

05 トピックス

1 就職率98・8%
2 オープンキャンパス2016
3 教育後援会役員会開く
4 摂泉会代議員会、懇親会
5 学生役員決まる
6 西安体育学院と国際交流協定締結
7 HANAKOプロジェクト来訪
8 体操シンガポールチーム、強化合宿
9 66%が学生生活に満足も、悩みも7割弱
10 定期体力測定　参加率95%超え
11 3氏に名誉教授授与
12 日本スポーツ産業学会会長賞を受賞して
13 下河内准教授、延世大で招待講演
14 スクールサポーターに支援金
15 復興支援に返礼
16 学友会、サンライズプロジェクト募金活動
17 スポーツバイオメカニクス　特別セミナー
18 研究倫理講習会に148人
19 教職員のための特別講演会
20 大学院特別セミナー
21 山本走り幅跳び進化の銀
22 平成28年度入学式
23 硬式野球女子準優勝
24 資金収支計算書・予算書

16 ひと　奈良渉さん
18 コラム　窓
19 我が青春の記　植木章三　中山健

大阪体育大学

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

第67回大会 盛大に

スポーツと〝ひと・社会〟
―融合と進歩の先に―

多勢の参加者でにぎわう学会（L号館）

スポーツ界では最大規模の日本体育学会第67回大会は、8月24日から26日の3日間、本学で行われ、延べ2769人が参加、成功裏に閉幕した。

大会は開学50周年記念事業の一環として全学を挙げて準備が進められ、6月に竣工したばかりのL号館（開学50周年記念館）をメーン会場に行われた。「スポーツと〝ひと・社会〟―融合と進歩の先に―」がテーマで、大会の趣旨を、スポーツが「ひと」の心身の発達と「社会」の平和と安寧に貢献し、文化として根づかせるための課題や目指すべき方向性を示すこと、とした。

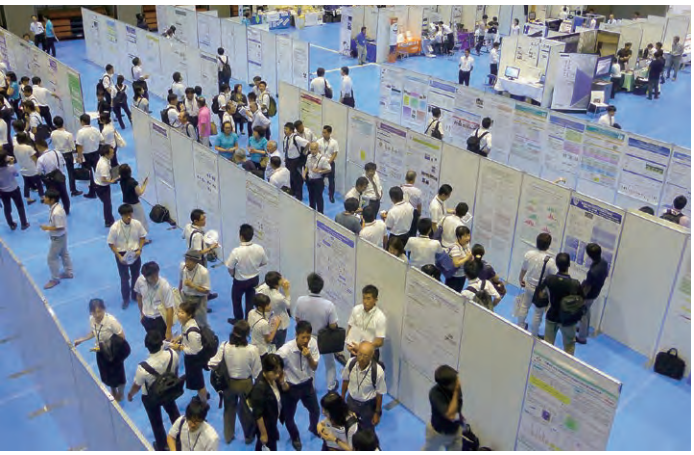
体育社会学、体育心理学、体育教育学等14の専門に分かれての分科会では、口頭発表が383件、ポスター発表が364件と、各フロアで活発な論議がなされた。また各日、〝ランチョンセミナー〟が13のテーマ別にあり、昼食を摂りながら、和やかな雰囲気で意見交換もあった。

最終日は一般公開の講演が企画され、馳浩前文部科学大臣が「コーチング・イノベーションへの招待」をテーマに、スポーツ基本法の制定や、スポーツ庁設立の経緯や背景について、また今後のスポーツ行政について基調講演を行った。

また、ライプチヒ大学のドロシー・アルファーマン教授による「スポーツ指導における暴力防止に関する欧州またはドイツの取り組み」や、一般公開シンポジウム「日本から発信するコーチング・イノベーション　スポーツ指導における体罰・暴力の根絶を目指して」では、土屋裕睦教授と文教大の小林勝法教授が司会を務め、トークは白熱し、多くの聴衆が熱心に耳を傾けていた。

期間中は35の企業・団体の展示、8つの協賛店に地元熊取の名産品を販売する物産コーナーも設けられ、参加者に好評だった。

次回の第68回大会は静岡大学で開催される。


ポスター発表を見て回る参加者たち（第6体育館）

日本体育学会

大島初代副学長をテーマにシンポジウム

本学初代副学長として礎を築いた大島鎌吉氏をテーマにした「スポーツを文化として根付かせるためにカール・ディームと大島鎌吉の意志を手掛かりに」のシンポジウムは8月25日開かれた。

首都大学東京の岩佐裕子氏（大学院博士後期1年）が司会、3人の演者で講演、議論が行われた。大島鎌吉の足跡をたどりながら、大島鎌吉像を毎日新聞に長期連載して話題を呼び、ミズノスポーツライター賞を受賞した毎日新聞社の滝口隆司水戸支局長は「大島鎌吉が遺したオリンピック思想」について語った。

意見を述べ合うパネリスト

大島鎌吉とは何者なのか？関西大学時代の1932年ロサンゼルス五輪陸上三段跳びで銅メダルを獲得。34年毎日新聞社入社後も選手として活躍し、36年のベルリン五輪では日本選手団旗手も務めた。ロサンゼルス五輪で国際オリンピック委員会（IOC）の理念を知り、帰国後に母校・関西大学学報で「人生で最も大切なことは、勝つことでなく戦うことである。本質的には〝勝った〟ことではなくて、けなげに戦ったことである。この規範の広く及ぼすところ、人間をより勇敢に人間をより強健にし、その上より気高くより優雅なものにする」と紹介した。大島と五輪思想の出会いである。

大島は自社がプロ野球球団（毎日オリオンズ、現千葉ロッテオリオンズ）を持つ時に「プロとはビジネスであり、新聞社がプロを持つのはおかしい」と反対し、IOCの副会長に相談してアマチュアリズムを信奉した。1964年、アジアで初めて開催された東京五輪選手団長、選手強化本部長にも就任し、金メダル15個の公約をして16個を獲得、役目を果たした。

東京五輪の閉会式では、整然と入場行進した開会式とは打って変わって各国の選手が思い思いに国立競技場に入り、国や人種を超えて友情を深めるという思いがけないサプライズになった。その事について大島は「世界平和のためにオリンピックが必要ということはこういうことだ」とコメントを残している。

オリンピック平和賞受賞

スポーツ少年団の創設と、本学の副学長に就任した後も平和活動を続けた。その時の口ぐせが「技術革新のマイナス防止を怠るな。怠る偸安を許すな」であり、「オリンピックは大宗教団体である。オリンピック宗の本尊は『フェアプレー』。世界共通の理念である」等々、様々な大島思想を発言、寄稿した。それらの貢献を称えられて1982年、オリンピック平和賞を受賞した。大島が生涯をかけて追求したのは、近代化する世界の中で人間はどう生きていくべきか、スポーツには何ができるかということで、大島の活動は世界平和に寄与し、今後も語り継がれていくだろう。

この後フロアから活発な意見や感想が述べられた。大島鎌吉については、広島市立大学の曾根幹子教授（モントリオール五輪走り高跳び）も「日本人戦没オリンピアン名をめぐる混乱とその真相、ベルリンに届けられた大島鎌吉の作成名簿から」として口頭発表している。

大阪体育大学では大島鎌吉氏を顕彰して開学50周年を機に「大島鎌吉賞」を設け、卓越した選手、スポーツ指導者を対象に功労賞、奨励賞を贈っている。

【学生記者　坂下貴彦】

大島初代副学長について話す、滝口毎日新聞水戸支局長

開学50周年記念館竣工

トレーニングルームもリニューアル

L号館（開学50周年記念館）が完成、竣工式神事が6月29日行われた。式には野田賢治理事長、岩上安孝学長をはじめ、教職員、工事関係者ら30人が参加して完成を祝った。

昨年6月30日に着工、総工費8億円をかけて建設され、鉄骨造り3階建てで延べ面積は1915平方メートル。南側は全面ガラス張りのモダンな建物が完成した。1階はトレーニングルーム、2階は500席の大教室、3階は300席の中教室と研究施設や事務室などが置かれた。

大・中教室には映像システムを導入、それぞれ大画面のスクリーンやスピーカーシステム、常設のHDカメラなどを利用して両教室を一体的に利用できるため、収容800人にライブ中継ができる。地デジ放送でのスポーツイベントの鑑賞も可能で、パブリックビューイングが行える。

記念館は開学50周年記念、環境整備事業の一環として、人間性と専門性を兼ね備えたスペシャリストづくりのため、教育・研究環境のため建設された。と同時に、トレーニングルームルームのリニューアルも成った。

1階展示ケースには、世界の舞台で輝かしい成績を収めた学生、卒業生のユニホーム、受賞楯などが展示されている。

完成したL号館（開学50周年記念館）

テープカットする関係者
（中央は野田理事長、
右は岩上学長、長家同窓会長）

五輪などで活躍したOB・OGのユニフォームなどの展示品コーナー

開学50周年記念植樹

植樹を終えて

開学50周年記念植樹式が4月5日に行われ、西川雅子教育後援会会長、副会長の福島佳小利さん、福西由樹子さん（当時）、野田賢治理事長、岩上安孝学長、福田芳則副学長ら、本学関係者が出席した。

正門横の位置に槇（イヌマキ）の木が植樹され、「慈愛」の花言葉をもつこの木に見守られながら、60周年、70周年と本学は歩み続ける。

就職率98.8%

文科省、厚労省調査上回る

キャリア支援センターが、平成27年度卒業生（9月卒業含む）の進路状況（5月1日現在）をまとめた。教員の合格者は27人、公務員は76人（いずれも延べ）の結果となった。近年は、教員、公務員とも安定した結果を継続。また企業では、スポーツ関連のみならず、ジョンソン・エンド・ジョンソン㈱や㈱読売新聞、㈱吉本興業、積水ハウス㈱、また地方銀行などさまざまな分野への進路が見られた。

体育・健康福祉両学部の就職率は98・8%（前年比1・2ポイント増）と増加した。また文部科学省および厚生労働省が発表した今春卒業の大学生就職率97・3%（4月1日現在）も上回った。

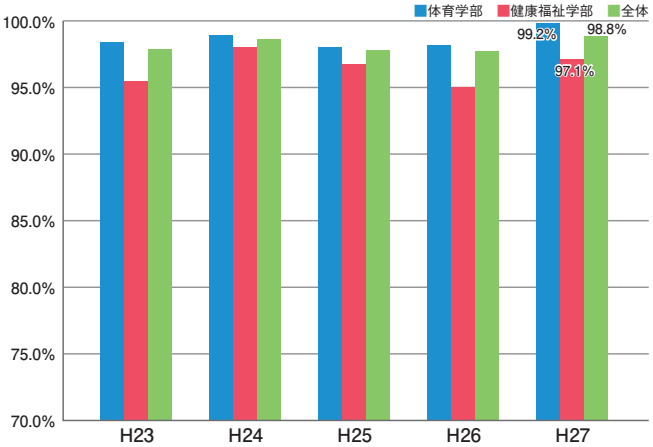
他大学から注目されるキャリア支援プログラムはより一層の充実が図られた。▽2、3年生を対象とした『キャリアセミナーA・B』（授業）▽1～3年生を対象とした短期集中講座『キャリアフェスタ』▽2年生対象『グループ面談』と3年生対象『個別面談』▽『学内セミナー』（企業説明会）▽学習支援室と連携した『公務員試験対策講座』▽キャリア支援部が行う『企業支援対策講座』▽夏休みに教職支援センターが行う『教員採用試験2次試験対策』など、教員、公務員、企業を目指すラインナップが揃う。スタッフ一同、今年度も学生たちの就職活動の成果に大きな期待を寄せている。

また今回の進路状況調査の結果は、教員、公務員、企業とここ数年の結果からも安定した高い水準の成果を見せている。高専門領域の先生方の教育や学外での実習活動、また厳しいクラブ活動で培った「大体大力」は、さまざまなフィールドで評価を受けている結果であると見ている。大阪体育大学は優れた教員を輩出する大学であると世間からも評価されるようになり、警察や消防、企業からも大体大生へのニーズや評価が高くなっている。

ただ今年度は、各大学をはじめ企業等においても不安要素も抱えている。政府が、日本の主要な経済団体（経団連、経済同友会、日本商工会議所）に対して、採用広報の開始は、3年生の3月と変わらなかったが、選考（面接）開始時期を4年生の6月にするように要請があり、就職活動スケジュールが昨年に続き選考開始時期が前倒しになった。就職活動スケジュールの変更は、企業の動向を見つつ、学生の就職活動への柔軟なサポート対応が迫られている。

今後もより一層、教職員が一体となってキャリア教育の充実を図り、さまざまな分野で活躍できる人材を継続して輩出できるよう、学生のための幅広い支援体制を整えていきたい。【キャリア支援部】

●大阪体育大学　就職率（H23年度～H27年度）



オープンキャンパス2016

多くの参加者でにぎわう

今年度も高校生、保護者対象のオープンキャンパスがスタート。7月3日は今年度からの試みで、保護者のみを対象にしたオープンキャンパス。大学を取り巻く環境変化や、学費、キャリア支援、教育支援センターなど、子どもを支援するシステムを説明、その後はキャンパスツアーや学食体験、周辺の環境を知ってもらう目的で、熊取町バスツアーというプログラムを提供した。

事前申込制だったが、予想を大きく上回る希望があり、一部プログラムを変更し、173人の保護者に参加いただいた。7月17日からは通常の高校生対象のオープンキャンパスを計4回開催。

今年も創作ダンス部、新体操部、ダブルダッチ同好会、応援団チアリーディング部による華麗なパフォーマンスで幕を明けた。今年度は、参加者が興味・関心のある大学の授業をできるだけ多く体験してもらえるよう、各回の体験授業を体育学部6コース、教育学部2コースの各回計8プログラムで実施するよう変更した。

初回の体育学部コーチ教育コース、宮地弘太郎准教授の「テニスの指導法及び実技」、同学部健康スポーツコース、熊﨑敏真講師の「体育大学で学ぶ筋骨格系の解剖学」、教育学部保健体育教育コース、後上鐵夫教授の「インクルーシブ教育とは」の体験授業を皮切りに4日間で32の授業を提供し、延べ1040人が参加した。

また「学部・学科説明」「キャリア、入試説明」は新しく竣工されたL号館（50周年記念館）で行い、2階、3階の教室が満席になる回もあった。各コースの学びを紹介する「学び紹介コーナー」や「キャンパスツアー」「ボーシャーカフェ（在学生とのフリートーク）」では、学生スタッフが中心に参加者の相談に丁寧に対応し、学生目線で大体大をPRしていた。

多くの参加者があった今年度のオープンキャンパスだったが、最終日の9月25日は、「入試対策講座」を行った。体育系予備校の講師による大阪体育大学の入試の傾向と対策を解説していただいた。【入試部】詳細はホームページで。

学部・学科の説明を受けるオープンキャンパス参加者たち

教育後援会役員会開く

新役員など決まる

平成28年度の大阪体育大学教育後援会役員会は7月23日、本学中央棟大会議室で開かれ、平成27年度の事業・決算報告、平成28年度予算、新役員などが決まった。

冒頭、西川雅子会長が「6月に新教育棟が開学50周年記念館として完成、竣工式が行われた。教育後援会としても積立金を有効に活用させていただいた」とあいさつ。

野田賢治理事長が「浪商学園は2021年に100周年を迎える。その間、ラグビーワールドカップや、東京五輪・パラリンピックなど世界的なスポーツ大会が開かれる。大学を中心にその流れに沿って立派な100周年を行いたい」と話し、岩上安孝学長は「今春、大学が有する高度な練習施設や、スポーツ科学の力で学生をサポートするDASH（大体大アスリートサポート・アンド・ハイパフォーマンス）がスタートした。このような活動を通じて2020年東京に結び付けたい」と大体大力を強調した。

事業報告、決算報告が承認された後、役員選出に入り、福西由樹子副会長が新会長に選ばれるなど新役員が別項のように決まり、福西新会長は「教育後援会の皆さまと、日本体育学等、開学50周年事業に全力で支援、応援していきたい。また学生が充実した大学生活を送れるよう、精一杯努めたい」と就任の抱負を述べた。

あいさつする福西新会長（右）

施設を見学

平成28年度の予算案が承認されて役員会は終わり、役員たちは、第6体育館、6月に完成したばかりのL号館（開学50周年記念館）、キャリア支援センター、教職支援センター、図書館、トレーニングルームなどの施設を見学した。

新役員は次の通り。会長　福西由樹子▽副会長　岡本栄子、棚村千鶴▽会計監査　辻本智子、渡邉樹世子

学生役員決まる

今年度の学生代表者総会が5月19日に行われ、学友会の新役員が決まった。

新役員は次の通り▽会長　大西飛翔（体育3年）ライフセービング部▽副会長　新井三廊（同）体育実技研究部、原由奈（同2年）日本拳法部▽総務委員　海野真琴（同）アルティメット部▽会計委員　堀内彩日（同3年）無所属▽家村聖菜（同2年）アルティメット部▽企画広報委員　別所衿奈（同）ソフトテニス部

摂泉会代議員会、懇親会

柔道の山本、なぎなたの林田に激励金

大阪体育大学同窓会、摂泉会第34回代議員会が7月9日、大阪市天満の同総会会館、アネックス4階の研修室で開かれ、平成27年度事業報告・決算報告が承認され、平成28年度事業計画・予算計画も審議後、承認された。

代議員会終了後、帝国ホテル大阪で行われた懇親会には、来賓として学校法人浪商学園から野田賢治理事長、大学から岩上安孝学長らが出席し、同窓生たちとの親睦を深めた。途中、日本代表選手や海外の大会などに参加し、成果や貢献をもたらした現役学生、卒業生に長家秀博会長（大阪歯科大准教授）から激励金の授与が行われ、本年度は、山本沙羅さん（体育4年、柔道部）、林田葉純さん（体育、平成27年卒、なぎなた）が選ばれた。

女子重量級のホープとして期待されている山本さんは「この激励を励みに東京五輪でメダルを目指す」と力強く話し、なぎなたの世界選手権個人優勝した林田さんは「世界選手権優勝者の名に恥じないよう、社会人としても頑張りたい」と喜びを述べた。

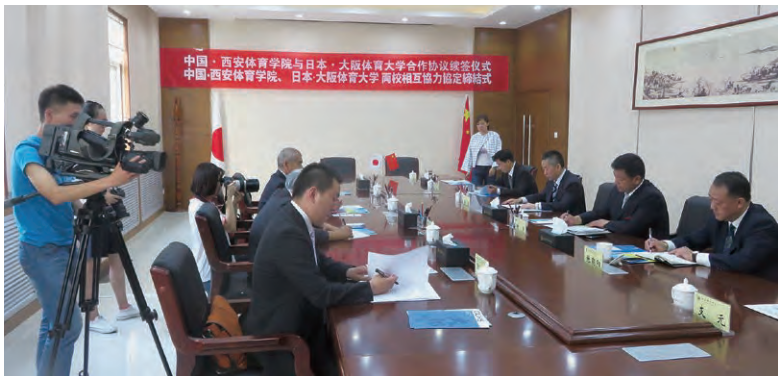
奨励金を受ける林田（左）、山本両選手（中央は長家会長）

西安体育学院と国際交流協定締結

中国の西安体育学院と本学との国際交流は、野田敏彦前理事長のご尽力をはじめ、多くの先輩教員の方々により、交流の軌跡が28年という長い年月をたどることになった。同学院との新たな国際交流協定を結ぶため、5月16日から19日の日程で、本学から岩上安孝学長、松本昌善学長室長、滝瀬のメンバーが訪中した。

協定書を取り交わす岩上学長（左）と周院長

交流初日に、同学院の周里院長を筆頭に大学首脳陣の列席のもと、両大学の国際交流協定の調印式を行った。周院長から今回の訪問に対する感謝の意を受け、岩上学長は、国際交流協定の調印に対する感謝を伝えた。スポーツの世界的競争が進む中、アスリートの育成強化を図るためには大学スポーツの果たす役割が大きく、両大学のパートナーシップを継続しながら共に発展を願いたいとの意向が示された。



協議する代表団（左が大体大、西安体育学院で）

大学院生及び教員を対象に、滝瀬が基調講演を行った。Ⅰ．アスリートのハイパフォーマンスを支持する新たなエビデンスとして「乳酸シャトルの生理メカニズムに関するモノカルボン酸トランスポーターの作用機序」と、トレーニング科学への応用についての提言。Ⅱ．アディポサイトカインによる脂質代謝の制御機構。Ⅲ．メカニカルシグナルと骨形成・骨吸収メカニズムとの関わりについて免疫組織化学実験、や電子顕微鏡を駆使した最新知見についての講演だった。

両大学は、体育大学の特徴を生かしたツールと厚い友情、信頼をもとに次世代に向けて夢のある研究・教育のパートナーシップを発展させていくことが再確認された。

【体育学部教授　滝瀬定文】

学院長ら来学

西安体育学院の周院長ら5人が、8月24日本学を訪れた。6月に岩上安孝学長らが同学院を訪問した際に取り交わした連携協定をさらに進めるためで、周院長は野田賢治理事長、岩上学長を表敬訪問、「今後も連携協力を進め、ともに発展していきましょう」と切り出した。2021年には、同学院が中国の国体にあたる体育大会のメーン会場になるため、体育館、競技場の建設を進めているそうで、岩上学長は「国際基準の施設が増えることは羨ましい。5月に訪問した際も室内に陸上競技場があるのには驚いた」と強く印象に残ったとの感想を述べた。

野田理事長も「日本には室内に陸上競技場はないです。大会が開かれる2021年は浪商学園が創立100周年を迎えるので縁を感じる。今後も良い関係を続けていきたい」と語った。

表敬訪問の後、協定についての会議がもたれ、周院長らはこの日から始まった日本体育学会を見学した。

来学した西安体育学院長ら（手前）と意見交換する
滝瀬教授（向かい左）、松本室長（右）

HANAKOプロジェクト来訪 フィンランドネットワーク

フィンランドの国家教育委員会が承認するプロジェクト『HANAKO ジャパン・フィンランド ネットワーク』のテーナ・トーレ国立職業訓練校学科長をリーダーとする11人が5月10日来学した。一昨年に次いで2度目の来訪。

同団体は、2011年、社会福祉法人隆生福祉会と、社会福祉分野で日本で初めてパートナー契約を結び▽他国とのネットワークを通し、双方の国における専門分野の更なる開発、強化▽双方のネットワークを機能的に促進するためのベストプラクティスのベンチマーク▽教育、実習、教材の開発▽海外交流を通した学生と教員の技術・能力の更なる向上を目的にこれらの活動を活発に進めている。今回は5月9日から13日までの5日間、本学の他、福祉関連企業、建築設計企業などを視察した。

実際に器機を使う訪問団員（左は梅林教授）

石川准教授（左）の話を聞く訪問団

フィンランドの福祉事業

同団体のテーマである「社会福祉におけるテクノロジー」について講演、福祉先進国であるフィンランドの福祉事業が紹介された。これを基に本学の教員と日本の現状と今後について意見を交換した。また同団体は「運動力学とモニタリングの方法」などにも関心があり、バイオメカニズム実験室で、体育学部の石川昌紀准教授が研究の紹介、設置器具の説明をし、同学部の梅林薫教授が、ATルーム、トレーニングルームを紹介、実際にランニングマシーンなどの器具を使うメンバーもいた。体育館では教育学部の曽根裕二講師の「障害者スポーツ実技」、車椅子ハンドボールの授業を見学した。

今回の訪問で同団体は、本学の教育・研究の状況を知り、教員との国際交流を深めるなど、今後のパイプをつないだ形になった。

体操シンガポールチーム、強化合宿

シンガポールの体操チーム、久住亮介コーチ、男子選手6人の総勢7人が、6月7日から24日まで本学で強化合宿をした。4月の関西インカレにはオープン参加した選手もいるが、本学で強化合宿するのは初めて。

一行はOUHSセミナーハウスに宿泊、本学の体操部員と合同練習に汗を流した。本学園内で体操の指導をしている小林隆先生たちが直接指導にあたり、久住コーチは「大いに成果があった」と感謝していた。

また選手たちは練習の合間にコミュニケーションを図って国際交流に一役買い、14日には天然温泉で疲れを癒し、同学部准教授で男子体操部の藤原敏行監督が幹事をして、大学生の他、大体大浪商の中学、高校生も参加して国際交流親睦会を開き、友好の輪を広げた。

練習後、記念撮影する選手たち

66%が学生生活に満足も、悩みも7割弱

学生生活実態調査

本学の体育、健康福祉、教育学部の学生委員会は平成27年度学生生活実態調査をまとめた。昨年10月13日から30日まで学生2616人全員を対象に、授業時に指導教員による直接配布・回収方式で行い、有効回収数は2158人で、全体の82・5%と前回の77・6%を大きく上回った。

1．基本項目（所属学部・学科、年次、性別、入学方法、居住形態）　2．住居と暮らし　3．授業・学習　4．課外活動　5．健康等　6．不安や悩み　7．マナー等　8．進路と就職　9．ボランティア活動　10．大学施設等　11．大学への意見・要望の11の調査項目があり、52の質問事項を分析している。

それによると自宅から30分未満（57・5%）のバイク通学（41・2%）で、1ヶ月平均の生活費は2万円～4万円未満（34・3%）が最も多く、うち約半数は、2万円程度を家族から貰い（48・0%）、アルバイトで4万円～6万円未満の収入を得ている（34・8%）。アルバイト代の約8割（81・3%）を生活費に回すほか、交際費（28・3%）、携帯電話・インターネット費（21・8%）として使っているという平均的大体大生像が浮かび上がる。

授業の出席状況は9割以上の学生が「80%以上」（92・1%）と回答しており、履修科目全体の授業内容の理解度は「まあまあできている」（61・3%）、「ほぼ理解できている」（23・7%）を合わせると前回より1・5ポイント高い85・7%の学生が「授業を理解している」と答えている。1日の自習時間、朝食摂取状況、図書館利用をクロスしてみると、自習時間が長く、朝食をとり、図書館をよく理解する学生ほど理解度が高まっている。

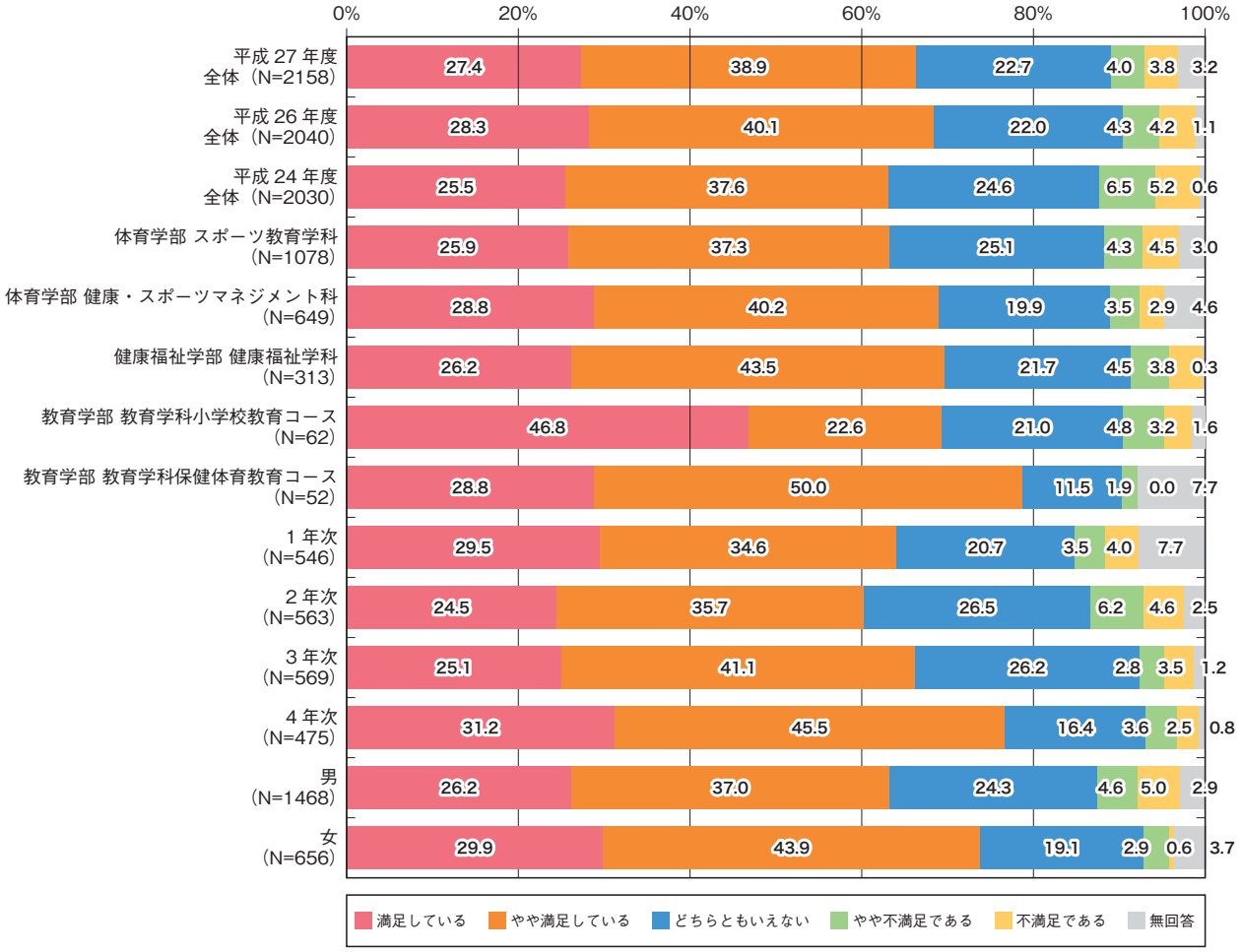
通信機器の所有状況はスマートフォン（86・1%）・パソコン（42・7%）でスマートフォンが最も多いが、年次があがるほどパソコンの所有が多くなり、1年次では37・2%だったものが、4年次では51・6%にはねあがっている。

またクラブ活動に参加している学生は78・0%、「クラブあるいは同好会・サークル」に参加しているのは体育学部スポーツ教育学科が87・2%と最も多く、体育大学ならではの実態が分かる。

悩みや課題については「少しある」（38・0%）「ある」（30・8%）で学生全体の7割弱が何らかの悩みや課題を抱えていることが分かった。悩みや課題として「就職・進路など」（53・4%）「クラブ活動」（40・6%）、「学業」（27・3%）などとなっている。

将来の希望職種は「教員」57・4%、「企業」35・5%が2強を占めている。また大学での学生生活の満足度としては「満足」（「満足している」＋「やや満足している」）は66・3%、「不満足」（「不満足である」＋「やや不満足である」）の7・8%を大きく上回っている。

学生委員会は「大学で学生がより有意義な学生生活を過ごせるよう、大学として取り組むべき課題解決方策実現に向けての基礎資料として活用していただきたい」としている。



定期体力測定　参加率95％超え

平成28年度の定期体力測定を4月7、8日及び23日（再測定）に実施した。1日目は嵐のような天候の中で、測定用紙が風で飛ばされ、プールに落下したアクシデントもあったが、2年生と3年生が、2日目は入学間もない初々しい1年生とベテラン4年生が、再測定は事情により両日参加できなかった学生を対象に行った。

今年度の試みは、敏しょう性の測定として実施してきた10メートルシャトルランを、切り返し動作の際の安全性や、全体をより基礎的な項目に絞ったことから削除とした。この定期体力測定で基礎的な体力を中心とし、各種目別の専門的な体力については、スポーツ科学センターで受け付けて、それぞれのフィールドで測定を実施する。そして、大学全体及び各種目別の体力強化、競技力強化へ少しでも関与することができればと考える。

別表でわかるように参加率は、体育学部男子で1．8％、女子で2．2％の向上が見られた。毎年100％を目標に実施してきているが、体育学部と教育学部で各学年おおむね95％以上の参加率を得たことは、ご協力いただいた先生、事務職員、研究員、教務補佐、大学院生や測定員をお願いした学生、それぞれの方々のお陰です。この紙面より御礼いたします。

【スポーツ科学センター体力測定部会、中井俊行　体育学部准教授】

平成28年度定期体力測定（4月7・8日実施）及び再体力測定（4月23日）結果について

表1　平成27年度の大阪体育大学定期体力測定の学部別参加者数

学年	男子学生			女子学生		
	体育学部	健康福祉学部	教育学部	体育学部	健康福祉学部	教育学部
1年	353名	-	80名	157名	-	48名
	98.9%	-	100%	98.7%	-	100%
2年	348名	91名	-	145名	40名	-
	96.9%	95.8%	-	99.3%	95.2%	-
3年	352名	71名	-	132名	32名	-
	94.1%	73.2%	-	95.0%	86.5%	-
4年	302名	76名	-	131名	16名	-
	※79.6%	71.7%	-	88.5%	66.7%	-
全体	1355名	238名	80名	565名	88名	48名
	93.8%	79.9%	100%	95.4%	85.4%	100%

※4年（男子）は留年生34名のうち4名のみの参加。
留年生を除いた4年生(男子）の参加率は79.6%

表2　平成28年度の大阪体育大学定期体力測定の学部別参加者数

学年	男子学生			女子学生		
	体育学部	健康福祉学部	教育学部	体育学部	健康福祉学部	教育学部
1年	379名	-	90名	140名	-	47名
	99.0%	-	100%	99.3%	-	100%
2年	351名	-	78名	155名	-	47名
	98.6%	-	97.5%	98.7%	-	97.9%
3年	346名	88名	-	148名	37名	-
	98.3%	92.6%	-	100%	88.1%	-
4年	348名	66名	-	132名	29名	-
	※1 87.2%	67.3%	-	※2 92.3%	80.6%	-
全体	1424名	154名	168名	575名	66名	94名
	95.6%	79.8%	98.8%	97.6%	84.6%	98.9%

※1 4年（男子）は留年生39名のうち6名のみの参加。留年生を除いた4年生(男子）の参加率は95.0%
※2 4年（女子）は留年生6名のうち4名のみの参加。留年生を除いた4年生(女子）の参加率は93.4%

表3　平成28年度の大阪体育大学定期体力測定の結果

測定項目		1年生	2年生	3年生	4年生
3分間SST (m)	男子	506.9±29.1	460.3±47.8	467.8±49.2	457.1±14.9
	女子	462.9±26.7	439.7±35.8	455.3±36.2	462.9±42.7
反復横跳び (回)	男子	60.4±7.2	58.9+7.6	58.0±7.4	59.0±7.3
	女子	55.0±5.6	53.9±5.9	54.0±5.7	53.1±5.8
上体起こし (回)	男子	38.9±5.8	36.6±5.9	36.5±6.4	36.9±6.7
	女子	32.3±5.0	31.3±5.3	31.2±6.2	31.8±6.3
握力 右 (kg)	男子	51.61±7.15	52.66±8.19	51.87±7.57	52.24±8.23
	女子	33.42±5.85	33.92±5.90	32.90±5.43	33.87±6.26
握力 左 (kg)	男子	48.73±6.92	50.72±7.46	48.96±7.87	49.32±7.80
	女子	31.84±5.52	31.99±5.77	30.80±5.07	31.89±6.03
背筋力 (kg)	男子	126.58±21.37	139.67±23.99	135.41±25.35	139.06±23.81
	女子	77.83±16.50	86.43±18.84	81.26±17.87	86.96±18.45
長座体前屈 (cm)	男子	53.7±8.1	49.5±9.3	51.3±8.9	50.3±9.2
	女子	53.4±7.5	50.1±8.26	52.0±7.63	51.8±8.5
垂直跳び (cm)	男子	64.4±7.6	62.8±7.8	63.9±8.0	62.7±7.8
	女子	47.5±7.2	46.8±7.4	45.9±6.0	46.8±6.1

数値は平均値および標準偏差を示す

体力測定に汗を流す学生たち

3氏に名誉教授授与

名誉教授授与式が7月13日、スターゲイトホテル関西エアポートであり、岩上安孝学長から体育学部の柏森康雄、浅野幸子、健康福祉学部の駒井博志3氏に、長年勤めた労苦に感謝の気持ちが伝えられ、称号が授与された。

柏森名誉教授は、1970年3月、東京教育大（現筑波大）体育学部を卒業してすぐに本学助手として奉職、91年に教授になり、体育学部長、副学長を歴任、保健体育教育法、体育の授業研究などを担当、バレーボール部女子部長兼監督として指導、アジア大会（86年、ソウル）、ユニバーシアードザグレブ大会（87年、クロアチア）で全日本男子チームトレーナーとして帯同、現在も関西大学バレーボール連盟会長をしている。

同名誉教授は「長い間お世話になりました。このような称号をいただき、大変光栄です」と話した。

浅野名誉教授は、1970年3月、横浜国立大を卒業、国際基督教大大学院に進み、教育工学専攻修士課程、同博士課程満期退学、97年本学教授、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大に留学、主に英語を担当。同名誉教授は「体育大学で教養教育の立場で教えるには、最初は苦労もありましたが、とても魅力のある大学でした」とコメント。

駒井名誉教授は、関西学院大、同大学院修士課程を修了、精神社会福祉論、精神保健福祉援助技術論を担当、精神障害者の地域での生活を支援するための施設経営を行うとともに、就労支援を目指し、個別的支援や職場開拓を行ってきた。同名誉教授は「健康福祉学部開設に携わることができて大変うれしく思いましたが、残念ながら閉部することになりました。まだ大学での仕事が2年あるので、最後まで努めを果たします」と感慨深げだった。

名誉教授号を受けた駒井（左から2番目）、柏森、浅野　3氏

日本スポーツ産業学会会長賞を受賞して

体育学部教授　藤本淳也

7月16、17両日、順天堂大御茶ノ水キャンパスで行われた平成28年日本スポーツ産業学会第25回学会大会で、学会会長賞をいただきました。スポーツ政策提案コンペに応募し、応募32案の中から第一次審査、第二次審査、そして最終審査を経て、審査員や学会員の方々から評価を得られたことだけでなく、最終審査において鈴木大地スポーツ庁長官の前で、プレゼンテーションの機会を得られたことも大変うれしく思っています。

受賞した政策案は、アジアのスポーツ界に詳しい上田滋夢先生（追手門学院大）とツーリズムに詳しい林恒宏先生（大阪成蹊大）と共に考えて発表した「アジアにおける人材育成を通した日本スポーツ産業の長期的成長戦略」です。このポイントは、①グローバルガバナンスに基づいた人材育成が日本のスポーツ産業の長期的かつ持続的発展につながる、②スポーツ庁だからこそできる、スポーツ庁だから取り組むべき人材育成への投資、③アジア各国で活躍する人材育成に多様な文化・社会を象徴するシンガポールでアジアサッカー連盟（AFC）の協力を得て日本が行う、です。

イメージとしては、政府開発援助（ODA）のスポーツ産業人材育成事業版です。この事業を通してアジア諸国のスポーツ組織や、政府機関で活躍する人材を育成し、アジアの平和構築やガバナンス改革と基本的人権の推進、人道支援に貢献していくことが、長期的に見て日本のスポーツ産業の発展につながると考えました。

現在、「2020年以降」へ向けてのスポーツ政策が求められています。スポーツへの機運が高まっている今こそ人材育成に注力すべきであり、優れた人材こそが未来に残すべき最も重要な「資産」であると考えます。そして、多くの卒業生が国内外のスポーツ界で活躍する本学も、これまで通り、そしてこれまで以上にその「資産づくり」に取り組んでいく必要があると思っています。

会長賞を受ける藤本教授（右）

下河内准教授、延世大で招待講演

アスリートがスポーツを続けていく上で、傷害・外傷を予防することや、健康を保つことは、パフォーマンスの向上と並んで最も重要な課題の一つだ。欧米を中心としたスポーツ医・科学の研究分野では、このような研究トピックで科学的研究が盛んに行われている。国際オリンピック委員会（IOC）は、世界中に9つのスポーツ障害・外傷予防などの研究を行う研究センターを認定しており、韓国の延世大も2014年にIOCに認定された研究センターの一つだ。

昨年9月18日、本学体育学部の下河内洋平准教授は、延世大で開催されたシンポジウム、「IOC Research Center for Prevention of Injury and Protection of Athletic Health Symposium」に招待され、2つのテーマで講演を行った。一つ目は「前十字靭帯（ACL）損傷予防のための着地のメカニクス」というタイトルで、同准教授がこれまで行ってきた科学的研究の成果や、そこから導き出されるACL損傷の予防方法に関してだった。

同シンポジウムには、全米アスレティックトレーナー協会が発行する学術誌、Journal of Athletic Training副編集長でヴァージニア大のジェイ・ハートル教授も招待され、同教授の研究テーマ、「慢性的足関節不安定症」に関して講演した。さらに、同シンポジウムで、同教授と下河内准教授は、米国、日本のアスレティックトレーニング教育の現状や課題に関してそれぞれ講演を行った。

また、シンポジウムの前日、下河内准教授とハートル教授は、延世大でスポーツ医・科学の研究を行っている大学院生らが開催した研究会にも参加し、大学院生や教員らと活発な議論を交わした。

同大学とは、本年度、本学大学院生らを交えた国際学術交流を行うことになっている。同大学のIOC研究センター長、セイ・ヨン・リー准教授と下河内准教授は、今後も継続的に学術的コラボレーションを行っていくことを見据え、学術交流を行っていく予定だ。

質問に答える下河内准教授（右）

スクールサポーターに支援金授与
7年連続7回目
国際ソロプチミスト大阪ーりんくう

本学教職支援センター（北川憲一郎センター長）を中心に取り組んでいるスクールサポート活動が国際ソロプチミスト大阪ーりんくうに認められ、7月13日、岡本尚子会長ら6人が本学を訪れ、学長応接室で岡本会長から岩上安孝学長に支援金とΣバッジが贈られた。本学の受賞は7年連続7回目。

岡本会長が「大阪体育大学の学生たちが、日ごろからサポートしていただいている活動は、地域の活性化に大きく貢献していただいており、国際ソロプチミストでも高く評価しています。支援ができてうれしく思います」とあいさつ、岩上学長は「本学のスクールサポートチームに今年も引き続き支援いただき、感謝している。大学としては今後も社会貢献や地域貢献に強く後押ししたいと思っている」と感謝の言葉を述べた。

〈シグマソサエティ〉学校と地域社会のために奉仕し、指導的役割を担いながら、諸活動に協力し、社会に貯めに尽くす団体を指す。Σはギリシャ文字のSに当たるΣに由来し、ServiceのSを示す。

〈スクールサポーター〉ボランティアで学生を募り、近隣の小学校や中学校の教員の授業や運動のサポートをする。学生たちにとっては、教員を目指すにあたって、実際に現場で学ぶ良い機会になっている。

岡本会長（右）から支援金を受ける岩上学長

国際ソロプチミスト大阪ーりんくうの会員たちと記念撮影する岩上学長たち

復興支援に返礼

南相馬市から来学

本学の学生が復興支援活動を行っている東日本大震災で大きな被害を受けた福島県南相馬市の応急仮設住宅友伸グランド集会所サロンから5人が5月25日来学、学生との親睦を深めた。

復興支援活動である「サンライズキャンプ　被災地復興支援活動　in　福島」は震災があった2011年から行われ、学生が被災地である南相馬市の仮設住宅で生活をする人たちに復興に向けての作業のお手伝いや、サロン活動に参加し支援活動を行っている。

5人は午前中に学内の施設を見学した後、サンライズキャンプ東北復興支援活動の報告会に出席し、学生たちが2月29日から3月3日の4日間、南相馬市で行った活動についての報告を温かく見守りながら熱心に聴いていた。

学生たちは報告会で「外遊びが少なくなった子どもへのスポーツ教室を行ったり、菜園のビニールハウスの撤去など、自分たちは今何が出来て、何が必要とされているかを考え支援活動を行った」と報告。

サロンの代表を務める杉重博会長は、全国からの支援活動への感謝を述べ、長い避難生活が続く中で必要としているものの中の一つとして心のケアを挙げ、また「生活環境が整っても若者の3割はふるさとに戻らないと言っている。こんな状態で本当に復興と言えるのか」と現状に疑問を呈した。

その後5人は学生食堂で、〝日替わり定食〟を食し、午後からはレクリエーションⅠの授業を体験し、学生との交流を大いに楽しみ、再会を約束した。

報告会であいさつをする杉会長

学生と一緒にレクリエーションの授業を体験する南相馬の人たち

学友会、サンライズプロジェクト募金活動

熊本・大分震災義援金

学友会とサンライズプロジェクトが協力して、4月14日に発生した熊本地方を震源とした熊本・大分地震で被災した人たちを支援するため、4月19日から5月13日まで、給品部レジ横、食堂レジ横、Yショップレジ横の3カ所に「今、できることを」と書いたポスターを張り、募金活動をした。

春のマナーアップキャンペーン中（4月21、22、25、26日）の昼休み時間帯には学内募金を行い、総額19万4854円の浄財が集まり、同時に書いてもらった激励のメッセージと一緒に日本赤十字社を通じて被災地に送った。

募金箱を手にした学友会員、サンライズプロジェクトのメンバーが昼休みに「被災地の支援にご協力ください」と呼びかけると「小額だけど」と言いながら募金箱にお金を入れたり「ご苦労様です」とねぎらいの言葉をかけて協力する学生などもおり、学内募金だけで14万8153円も集まった。

両グループは「募金活動にご協力いただき、ありがたかった」と感謝の気持ちを表していた。

募金活動をする学生たち

スポーツバイオメカニクス特別セミナー

体操競技の応用科学

国際スポーツバイオメカニクス学会長、ガレス・アーウィン博士と、ロマン・ファラナ博士による特別セミナーが7月15日、本学で行われた。

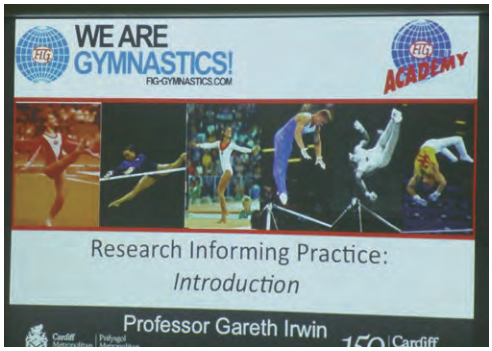
アーウィン博士は体操競技の元英国代表選手、代表コーチの経験を持つ研究者で、国際スポーツバイオメカニクス学会（ISBS）の学会長。ファラナ博士も元体操競技選手で、ISBSのNew Investigator Awardを受賞するなど研究者として第一線で活躍している。

「体操競技の応用科学」パフォーマンス向上と障害予防、演技評価に向けたバイオメカニクス的アプローチと題されたセミナーでは、藤原敏行体育学部准教授が通訳を務め、30人あまりの受講者が熱心に聞き入っていた。

また本学では、プロジェクト研究の対象事業として、つり輪とあん馬の2種目で、本学独自の測定装置と、トレーニング用アプリケーションを開発し、学習者が主観的感覚と客観的情報を混ぜ合わせながらより効果的なトレーニングを行えるようにし、多くのデータ測定を可能にすることで、スポーツ科学研究の促進を目指している。

16年4月からスタートしたDASH（大体大アスリートサポート&ハイパフォーマンス）プロジェクトでも、本研究による競技パフォーマンスの測定を通じ、器械体操のパフォーマンスの可視化と客観化が、選手自身の自律トレーニングを促すと共に、更なるコーチング力の向上に資すると展望し、選手のサポートとは別の側面で、全面的にサポートしている。

講演するロマン・ファラナ博士（上）、ガレス・アーウィン博士



アーウィン博士の講演データ

研究倫理講習会に148人

第2回研究倫理講習会が5月18日、本学に野内玲氏（信州大医学部 CITI Japan プロジェクト 特任助教）を講師に招いて行われ、本学の教員、大学院生、研究に関わる事務職員148人が参加した。

この講習会は2014年8月に文科省が「研究活動における不正行為への対応などに関するガイドライン」が定めたのをきっかけに昨年初めて行われ、昨年は指定した教職員の全員が、eラーニング（インターネットを利用した学習形態）を利用した学習を行った。不正防止対策のさらなる理解や、意識を高めるために研究倫理教育は全学的な取り組みとして徹底すべきであるとされ、今年も開催となった。

野内氏は「研究倫理教育の背景」や「研究倫理とは何か」といった話や「研究不正の定義」を説明し「文科省や資金分配機関のルールもどの分野の習慣も変わる可能性がある。ある時代に通用した慣習がいつのまにか時代遅れとなる」とし「だから研究倫理・研究公正の継続的な教育が必要だ」と説いた。

また前島悦子研究倫理教育推進部会長（体育学部教授）から、eラーニングの説明も行われ、参加者たちの倫理意識は大きく高まった。

講演する野内氏

教職員のための特別講演会

10年後を見据えた大学改革の方向性

教職員のための特別講演会は7月14日、本学中央棟大会議室に株式会社「学び」の寺裏誠司社長を講師に招いて行われた。

講演会で寺裏社長は、約200人の教職員を前に「10年後を見据えた大学改革の方向性」をテーマに「未来予測から見える大学淘汰を加速する4つの外圧」「中長期レンジでの生き残りの可能性」「今すぐ実施でき、成果の高い改革成功事例」などを詳しく説明、私立大学の置かれている現状と課題など、これからにつながる重要な点を話した。

本学の10年後の外的環境を展望するため、50周年を迎えた大学が新たな道を踏み出し、5年後の学園100周年を見据え、教職員が一緒になって大学をしっかり見渡せることが大切とし、次年度から大学設置基準で、全学的な教職員対象のSD（標準偏差）実施が義務付けられる中、ますます教職協同の充実性を求められることなどから、今回の講演会になった。

寺裏社長は、リクルート（現リクルートHD）で24年間一貫して教育機関マーケットに従事し、その経験を生かして学校改革のコンサルティング会社「学び」を設立、これまでに大学、短大、専門学校、約250校、高校、約2500校のコンサルティング支援に当たっている。

教職員たちは講演を真剣に聴き、より一層魅力ある大学づくりに向けて一丸となって改革に取り組むことの重要さを再確認していた。

寺裏社長の講演を熱心に聴く教職員

大学院特別セミナー

大学院の後期授業の一環として、毎週月曜日に外部講師を招いて授業を行う「スポーツ科学セミナー」の第1回目が9月19日にあり、東海大スポーツ医科学研究所の小澤治夫教授（医学博士）が「勢いのある体育授業と体育教材の作り方」というテーマでセミナーを行った。この日は保健体育教員を目指す学部生も多く参加し、同教授の実体験を踏まえた様々な視点からの話は大盛況だった。

授業は、まず全員で「グー・チョキ・パー」のボイスアンサンブルと、ボディーパーカッションという声と身体を使った動きから始まり、その後も同教授の迫力のある声とボディーランゲージでセミナーが続いた。

同教授は、筑波大学附属駒場中学校・高等学校で25年間教鞭をとり、北海道教育大を経て、現在は東海大で保健体育科教育学、トレーニング科学、発育発達学、教師教育を専門としており、専門知識も幅広い。体育教師には「意味のあることを熱意をもって上手に教える」ことがいかに大切で必要であるかと説き、参加者たちの心にも響いた様子だった。

ユーモアたっぷりに話す小澤教授

ボディーパーカッションをする院生たち

山本走り幅跳び進化の銀、8センチ及ばず

リオパラリンピック

南米で初めて9月8日から開かれていた第15回夏季パラリンピック・リオデジャネイロ大会は9月18日（日本時間19日）閉幕した。159の国と地域から約4300人の選手が出場して22競技、528種目で熱戦を繰り広げた大会は、NHKが五輪並みに中継、各マスコミも本格的にスポーツ記事として掲載、スポーツジャンルに入った。

日本は前回のロンドン大会を8個上回る24のメダルを獲得したが、初参加した東京大会（1964年）以来初めて金0に終わった。スズキ浜松ACの山本篤選手（大体大DASH認定アスリート／大学院博士後期課程12期生）は、男子400メートルリレー（T42―T47）のアンカーとして4着でゴールインしたが、1位の米国が失格して銅メダルとなった。男子100メートル（T42＝切断／機能＝）で7位入賞、世界記録も樹立して得意とする走り幅跳びで「金」を期待されたが、現在の世界記録保持者のポポフ（独）に8センチ及ばず、6メートル62で銀メダルとなった。

走り幅跳びで銀メダルを獲得した山本篤選手

1、2回を失敗した山本は3回目でペースを取り戻して3位に付け、4回目に観客に手拍子を求めて助走、6メートル62を記録して2位に浮上、1回目で6メートル70を記録したポポフに最終跳躍で逆転優勝に挑んだが、結局、4回目がベスト記録になった。

山本は「悔しい。8センチ超えられなかった。たくさんの観客を味方につけて、すべてをぶつけようと思った。金色を取れば英雄になれると思ったが（これが）実力です」と悔しがった。

スタンドには母校・大体大の陸上競技部員が寄せ書きして壮行会で贈られた大きな旗が張られ、山本は日章旗を手にグラウンドから感謝の気持ちを伝えていた。34歳の山本は「まだ進化しているので応援してください」と4年後をにらんだ。

※日本パラリンピック委員会（JPC）、NHK「Rio 2016 パラリンピック」、毎日新聞デジタル版、スポニチアネックスなど。写真は自身のフェイスブックから。

ひと

新教育委員会制度施行後、初の本学OB教育長（枚方市）

奈良　渉さん（66）

歯切れの良い口調からバイタリティを感じさせる。枚方市立第三中学校の校長で定年を迎えた。その後の5年間、大阪府教委の学校支援員として、児童、生徒の学力向上に尽くした。それも終えたら、市教育長の重責が待っていた。新教育制度で、教育長と教育委員長の二本立てだったものが教育長一本になった。権限と責任の重大さがずっしりのしかかった。

教育長として学校支援員の5年間、教育を客観的に見られたのが役立っていると言う。全国学力テストでトップレベルを誇っていた枚方市が、平成19年度を境に下降線をたどっていた。「何故か？」。枚方市はニュータウンとして家庭教育に恵まれ、学力が高い。学校に頼らなくても学力は保持できる。逆にダウンタウンでは、きめ細かい手厚い指導が受けられる。

全国学力テストに対応できるように学校が体力、知・徳・体のバランスがうまく取れるようにしなければ…。初年度は学力向上に全力を上げることにした。各校の校長と話し合い、中、高校の教員は「講義形授業を良しとしている」ことに問題ありと見る。子どもたちが求めているものは、決して講義形授業ではないのだ。

月1回、強化部会を開き、定期テスト、授業方法などを徹底的に話し合う。教員の力を高め、子どもたちの力を見直すために子どもの発達段階に応じた授業改善、家庭教育が大事だと力を込めた。録画した授業中の教員のビデオを題材に、部会で意見交換、そこから「良い授業の進め方」を学べることもあるという。

大体大の後輩たちには「自信を持て。得意分野に気づき、それを伸ばせ」とアドバイスを送る。【相馬卓司、写真も】

×××××

〈略歴〉大体大5期生。中、高校時代は陸上、水泳、柔道部を体験したが、大学では部活をせず、茨木SCで水泳の指導員。週に1回はジム通い。2年近く毎日、腕立て伏せ200回を欠かさない。妻と二女。

698人仲間に

～平成28年度入学式～

平成28年度の入学式が4月2日、スターゲイトホテル関西エアポートで行われ、大学院生29人、学部生669人が希望を胸に新たなスタートを切った。＝写真＝

式典では学生一人ひとりの名前が読み上げられ、岩上安孝学長が「一人ひとりが、自分の時間を大切にし、一日一日を前向きに取り組んでいく生活スタイルの確立に努め、悔いのない大学生活はもとより、将来の自立に向けた第一歩を踏み出していって下さい」と式辞を述べ、野田賢治理事長は「（50年の）伝統を受け継ぎ、大体大生としての自覚をもって、日々研さんを積んでいただきたい。そして、体育・スポーツのフロンティアを目指して欲しい」とはなむけの言葉を送った。

このあと3人が新入生総代としてそれぞれ壇上に上がり、大学院の山本葵さんは「スポーツが持つ力に背中を押され、また人の背中を押す手助けができるように楽しく、そして厳しい姿勢で研究と勉学に励む」、体育学部の佃航佑さんは「体育・スポーツを通じてあらゆる人々に勇気や感動、そして元気を与えられる人材になりたい」、教育学部の楠井克弥さんは「人との関わりを大切にし、夢の実現に向け精進する」と誓った。

硬式野球女子準優勝

優勝まであと一歩に笑顔なし

高校、大学、社会人が頂点を目指す、全日本女子硬式野球選手権大会は、8月6日から10日まで、松山市のマドンナスタジアムをメーンに行われ、大体大は決勝で、環太平洋大に4―7で敗れたが、準優勝の栄誉に浴した。昨年は初戦敗退の大体大は、09年の創部以来最高の成績を収めた。

決勝では先発のエース・徳原美穂（体育2年）が初回からつかまり、失策などもあって一挙6失点でいきなり劣勢に立たされた。大体大はその裏2得点、四回にも2得点と徐々に点差を詰めるが、四回1死から登板した環太平洋大の横手投げの投手の前に沈黙。最終回に2死満塁という好機を得て、日本代表候補にも入った田中亜里沙（同2年）が左翼スタンドまであと数メートルという大飛球を放ったものの相手の左翼手に阻まれた。

リーダーシップを発揮しチームをまとめ、優秀選手賞にも選出された森本華菜主将（同4年）は「今までのチーム以上に練習をやってきて、それを（最後に）出せなくて」と決勝での敗戦に悔しさを滲ませたが、チームは昨年の初戦敗退という結果から「勝ちたいという気持ちが強くなり、試合を想定した日々の練習で自信をつけてきた」と大躍進を遂げた。

昨年を大きく上回る結果にも、サヨナラ勝ちが目前に迫っていただけに、優勝が消えてしまい、準優勝にも選手たちの笑顔は見られなかった。

準優勝した硬式野球女子の選手たち

お詫び　7月15日発行のOUHSスポーツ26号に掲載した「本学OB、OGの五輪出場者」中、バルセロナ五輪の高山亜樹さん、長野五輪の小野田稔也さんが抜けておりました。お詫びして訂正、一覧表を掲載します。

本学OB、OGの五輪出場選手

年	開催地	氏名	種目	卒業年度	当時所属
1972	ミュンヘン	山　三保子	走高跳	S46	岡輝中教員
1976	モントリオール	山崎　京子	アーチェリー	S51	4年生
1980	モスクワ	日本不参加			
1984	ロサンゼルス	志賀　良弘	ハンドボール	S53	ワクナガ薬品
		高見　公明	ボクシング	S57	奈良県・王寺工業高校教諭
		石森　宏一	レスリング	S58	大阪府警
1988	ソウル	山本　興道	ハンドボール	S57	大崎電気
		玉村　健次	ハンドボール	S57	湧永製薬
		山村　敏之	ハンドボール	S61	本田技研
		高智　美津穂	シンクロ	H3	1年生(韓国代表として)
1992	バルセロナ	高山　亜樹	シンクロ	H3	ラサ スイミングスクール
1996	アトランタ				
1998	長野	小野田　稔也	ボブスレー	H4	グローバリー
2000	シドニー				
2004	アテネ	上原　浩治	野球	H10	読売ジャイアンツ
2008	北京	上山　容弘	トランポリン	H18	大学院2年
		小村　恵理佳	シンクロ	H16	井村シンクロクラブ
		上原　浩治	野球	H10	読売ジャイアンツ
2012	ロンドン	上山　容弘	トランポリン	H18	大学院3年
2016	リオデジャネイロ	藤春　廣輝	サッカー	H23	ガンバ大阪

パラリンピック出場選手

年	開催地	氏名	種目	修了年度	当時所属
2008	北京	山本　篤	陸上競技	H24	スズキ浜松ＡＣ
2012	ロンドン	山本　篤	陸上競技	H24	スズキ浜松ＡＣ
2016	リオデジャネイロ	山本　篤	陸上競技	H24	スズキ浜松ＡＣ

コラム

ボーシャー

体育学部教授　滝瀬定文

カワハギ・イラチ学

イカダはガラガラ状態。気分良く自分だけの釣りを楽しんでいました。ところが、午後の便がやってきて、「初めてやから一緒に釣らせたってや～」と船頭の第一声で途端に息苦しくなりました…。内心嫌やなあ～と思いつつ顔は愛想笑い。慣れない環境でよく起きてしまうのが緊張。今回はそんな場面での緊張の正体に迫ります。人は緊張すると、交感神経が刺激を受け、アドレナリンが分泌されることで、心拍数が上昇します。では、そもそもなぜ人は緊張するのでしょうか？名人の域に達していた釣り師４人（女性１人含む）に協力していただき、釣行中の心拍数を測定しました。百発百中でカワハギをバカスカ釣り上げテンションが上る…。が、１人がどうしても釣れない「ホラまた釣れた。釣れんか？下手クソ」。カッカカッカと頭に血が上り、興奮は収まらなくなってしまった。

図１に示すＢさんの心拍数の変化は、釣り開始５秒後の心拍数が82拍／分、25秒後にチャリコのアタリで93拍／分。その30秒間に強烈なジャブが入ります。「アタッとるがな！　早よ～アワセな!!なにしとんや！竿をクイッとしならせる。遅いがな～」心拍数は91拍／分。１分25秒後「アタッてる、アタッてる」「バシ！」…ヒラヒラと背ビレをなびかせて上がってきたのはキタマクラでした。

「なんじゃそれ～ヘタクソ～」…。101拍／分へボンボンボンと上昇。脳が非常事態と判断、的確な指令を身体に出せなくなっています。「周りがガタガタうるさい!! 黙ってくれ。なんで俺のときだけごちゃごちゃ言うねん!! 腹立つわ！最悪や」カリカリしていたＢさんは、タバコのフィルター部を耳栓に、ちゃち入れを無視。すると心拍数が80拍／分前後を維持し本来の自分を取り戻した。

陸に上がり再び波止で釣り再開。それまで満ちていた目の前の海がみるみる引いて気づけば、干満差が5㍍になっていた。「ウヘ！高！怖、足が震えるわ」。不思議なことに呼吸を止めていました。適度な緊張では、息が止まったのも無意識のうちに落下を回避し、筋力を高めるためだったのです。そして、「下をのぞき込んだら、股の間がスースーして血の気が引いたわ。指先も冷とうなった」。交感神経の緊張で心拍数が一気に跳ね上がり、手の毛細血管の収縮、それによる血流量の減少で手の表面温度は低くなったためでしょう。

その場で胡座（あぐら）をかき、目をつぶり、腹式呼吸を勧めた。そして太腿に手を置いた。すると、体と心が潮の香りで満たされたのだろうか。副交感神経が上がったのか、すがすがしく大らかな気持ちになった。温かい太腿に手を置くと、手の表面温度が上がり緊張が和らぐ。「どないなっとるんや!!釣れへんがな！」の前に、緊張解消法を考えてみてはいかがでしょうか。カワハギの夏、これにて了。

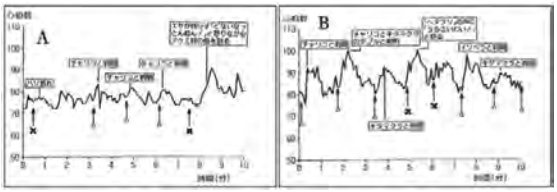


図１　10分間の実釣における心拍数の変化

大阪体育大学 平成27年度 資金収支計算書

（収入の部）　（単位：円）

科目	金額
学生生徒等納付金収入	3,138,380,556
手数料収入	84,008,900
寄付金収入	58,571,377
補助金収入	390,018,676
国庫補助金収入	389,820,000
府県補助金収入	198,676
資産売却収入	0
付随事業・収益事業収入	9,897,547
受取利息・配当金収入	315,555
雑収入	66,914,536
借入金等収入	0
計	3,748,107,147

（支出の部）　（単位：円）

科目	金額
人件費支出	1,884,587,064
教育研究経費支出	809,803,252
管理経費支出	203,139,845
借入金等利息支出	0
借入金等返済支出	0
施設関係支出	521,383,802
設備関係支出	306,052,981
計	3,724,966,944

大阪体育大学 平成28年度 資金収支予算書

（収入の部）　（単位：円）

科目	金額
学生生徒等納付金収入	3,206,310,000
手数料収入	75,560,000
寄付金収入	65,000,000
補助金収入	347,200,000
国庫補助金収入	346,000,000
府県補助金収入	200,000
学術研究振興資金収入	1,000,000
資産売却収入	0
付随事業・収益事業収入	9,460,000
受取利息・配当金収入	100,000
雑収入	166,170,000
借入金等収入	0
計	3,869,800,000

（支出の部）　（単位：円）

科目	金額
人件費支出	2,033,260,000
教育研究経費支出	897,410,000
管理経費支出	179,880,000
借入金等利息支出	0
借入金等返済支出	0
施設関係支出	570,800,000
設備関係支出	194,210,000
計	3,875,560,000

窓

◆◇確か、シンクロナイズドスイミングの井村雅代監督に聞いたのだと思う。五輪のメダルを「銀は金より良い。銅は金と同じ」と評した。つまり銀と銅を分解するとこうなるのだと言う。銀は金偏に艮だから良しから点を抜かなければならないが、この際それは置いておこう。◆◇初めてシンクロが登場したのは１９８４年のロス五輪からで、毎日新聞の特派員として五輪前から井村さんを追いかけて取材したものだ。もっともその当時、井村さん宅と拙宅はお隣さん同士だった。◆◇シドニー五輪（２０００年）の後日談として井村さんに聞いたのは「金しかメダルではないと言っている子がいたのよ。頭にきたわ」。井村さんは、選手たちに立派な銀メダルをもたらしたのだから無理はないと思った。ところがリオ帰りに各ＴＶ局に引っ張りだこだった井村さんは、アナウンサーの「井村さんはロスからリオまで全てメダルをもたらせていますね」に「金がないもの」と言った。本心だろう。マスコミが「金、金、金」と騒ぎたてるのも如何とは思うが、東京五輪では「金」にたどり着いて欲しいが僕の本心だ。【相馬卓司】

我が青春の記

教育学部教授
植木章三

“相撲部屋”での生活

小学校時代、一番苦手な科目は「体育」であった。「ドッチボールがキャッチできない」「徒競走はビリから二番目」という有り様。保健室からは「肥満児」の烙印を押され、運動が苦手なことは外見からも容易に想像された。そんな私が、保健体育の教員免許を取得するに至る道筋は、中学入学後、急に足が速くなり、陸上競技部に勧誘されたことに始まる。

しかし、短距離選手としては県大会にも進めず、しかも高校受験で再び「肥満児」となった私は、高校では陸上競技から足を洗うつもりだった。ところが、友人に唆されグラウンドに顔を出したら「飛んで火に入る夏の虫」。赴任したばかりのハンマー投げを専門とする顧問が、肥った私を見て、「ハンマーやれ」の一言で、再び陸上競技部に籍を置くことになった。お陰で、高校時代はインターハイ2回、国体1回出場と、体育が一番苦手な生徒が通知表に5をもらい、筑波大学体育専門学群に入学することになった。

大学では、陸上競技部の投擲寮に入ることになった。6畳一間に185㌢、85㌔の大男との同居生活である。食事も当番制で、全員分を作り一緒に食べる、まるで相撲部屋のような生活が始まった。夜は、陸上競技の話に加え、趣味や恋愛の話に花が咲いた。この共同生活を通じて、つらいことも多かったが、「忍耐」と「思いやり」の精神を養うことができた。4年間の寮生活が、私の人間力を培ってくれたと信じている。

人生は思いも寄らぬ偶然の出会いが重なり、人知を超えた方向に進むものである。寮で出会い、共に過ごした先輩や後輩は、いずれも教育界の要職に就いている。あの相撲部屋のような生活に今も感謝している。

夏合宿（1982年7月）での筆者（右端）

春合宿（1983年3月）ハンマーを投げる筆者

体育学部准教授
中山　健

幸運な出会い

競技活動（サッカー）一辺倒だった私の学生生活に変化をもたらしたのは、学部3年生で所属したゼミナールであった。指導教員は、スポーツ社会学を研究領域としながら、地域の子どもから成人までを対象にレクリエーションや、キャンプの活動を行政や、民間団体と連携して主催する実践家でもあった。

ゼミナールに所属するきっかけは、2年生の時に受講したスポーツ社会学の授業で取り上げられた「高齢社会におけるスポーツの役割に関する内容」に興味を持ったことだった。高齢者とスポーツに関連することを、勉強するものだと考えていた私にとって、半ば強制的に参加させられるレクリエーションや、キャンプの実践は、自分自身がかつて体験した「競技化」する以前の「遊び」としての身体活動などを思い起こさせる契機となった。

またこれらの体験は、スポーツという現象が競技以外にも様々な方向に開かれており、それにかかわる人々も、子どもから高齢者、障がい者と多様であることを再確認する機会ともなった。学部4年間の生活で、前半2年間は競技活動のことだけを考えていたが、後半2年間は競技活動にゼミナール活動も加わり、あっという間の4年間だった。

大学4年生の時、指導教員から大学院進学の話を勧められ、迷った末に研究職を目指すこととし、今に至る。現在、本学で担当している授業科目の中には、学部生や大学院生時代に経験したことが礎となっているものもある。ゼミナールでの指導教員及び思いもよらぬ活動との出会いがなければ、今の私は存在していなかっただろう。そう考えると、私は幸運な出会いに恵まれていたと思わざるを得ない。

大学院2年生（98年8月30日）
スペシャルオリンピックス全国大会
（右が筆者）

大学3年生（95年8月21日）
親子キャンプでの1枚
（後列左から2人目が筆者）

極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】
●博士＜前期・後期＞課程

【体育学部】
●スポーツ教育学科
●健康・スポーツマネジメント学科

【健康福祉学部】
●健康福祉学科

【教育学部】
●教育学科

企画広報室

大学事務局
庶務部、教学部、入試部
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設
図書館、生涯スポーツ実践研究センター
健康福祉実践研究センター、情報処理センター
スポーツ科学センター

支援組織
教養教育センター、キャリア支援センター
教職支援センター、学習支援室
学生相談室・カウンセリングルーム

http://www.ouhs.jp

OUHSジャーナル　2016年（平成28年）9月30日（金）
発行所：大阪体育大学企画広報室　発行責任者 白須和平、編集長 相馬卓司、編集助手 増田知己　　協力：教育後援会・学友会
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1　電話（072）479-3111　FAX（072）453-8972